

《公開講座》

オリ・パラと「アスリート」の観かた

——その人間性と身体的卓越性に迫る——

佐 藤 洋

〈概要〉今回の講座ではオリンピックやパラリンピックを題材に、スポーツの世界を生きるアスリートに焦点を当て、その「観かた」を紹介した。スポーツとりわけ競技スポーツを実践するアスリートを対象に、我々はスポーツの観戦からアスリートの何に注目できるのか、そして何を学ぶことができるのか、という点を中心にレクチャーしている。

講座の展開は、来る2020年の東京オリンピック・パラリンピック大会を通じて「いったい何を観させられるのか」、次に、アスリートの努力という抽象的に捉えられがちな姿の「いったい何に着目すればいいのか」、そして最後に、我々の目に映るアスリートの姿から「いったい何を学ぶことができるのか」、とした。

アスリートと卓越性

アスリートは、スポーツの遊技性よりも競技性を追求していく存在であり、相手との比較が可能なスコアや計測タイムなどの数値化された「強さ」を競って勝利を目指す。たとえば、ラグビーであれば、アスリートが相手と競い合っているものは、身体の屈強さや足の速さ、あるいは競技の技術といったものである。まさしくこれらは、競技スポーツにおいてアスリートが勝利するために必須の「強さ」であり、それはまさに「卓越性」と呼ぶことができる。スポーツ哲学者であるポール・ワイス (P. Weiss) は、アスリートと卓越性 (excellence) のかかわりを次のように述べている。

アスリートは彼自身を現在充足するために戦っている。現在は彼が彼自身を造りだしている時である。彼は、未来ではなくて、現在、彼に可能である卓越を求めており、卓越できるし、卓越するのである¹⁾。

卓越(性)を、競技スポーツにおいてアスリートが勝利するために必要な「強さ」という意味に置き換えて考えてみる。すると、アスリートが勝利や成功という目標を立てたならば、今よりさらに強くなるために、多くのトレーニングを積む必要がある。卓越を追求することは、ある種、アスリートとしての責務になる。

卓越は一朝一夕に身につくものではない。まして勝利という結果はすぐに顕在化しない。アスリー

トは、極端にいうと、生活のほぼすべてを卓越の獲得のために費やすこともある。アスリートは今よりもっと強くなろうとして、卓越を獲得するような存在である。

アスリートが生きる世界

アスリートが勝利や成功を目指すのであれば、今よりさらに卓越する必要がある。しかし、アスリート自身が勝利や成功のために最善を尽くした生活をしようとも、病気やケガ、精神的な不安や葛藤、練習環境の不備、生活環境の変化など、大きな壁に突き当たることもある。そうした身体的、精神的、環境的な要因の変化は、競技スポーツの世界で生きていくうえで宿命的なものである。だがアスリートが勝ち続けるためには、それらは乗り越えなければならないものでもある。

スポーツ社会学者のマンデル (J. D. Mandle) は、現代のスポーツについて、「スポーツは、正義、相互依存、共同、そして達成という重大な人生の課題が積み重なった『場』なのである」²⁾と述べる。この主張を聞く限り、スポーツにおけるアスリートは勝利だけを至上命題としているのではなく、スポーツの場にいるからこそ正しく在ることを求められ、相互依存と共同の枠から外れないようにして、そして自分自身が何らかを達成することもできるように、多面的に生きる必要があると考えられる。

スポーツがこうした「場」であることを踏まえると、アスリートの競技生活は、スポーツにおける強さという卓越だけに執心すればよいのではないことが理解できる。実際、アスリートを取り巻く環境においては、さまざまな問題が指摘されている。たとえば、練習環境の格差、暴力やハラスメントの問題などは代表的なものである。スポーツそのものですら、「政治、経済、教育、宗教などの現実と密接に関係しながら、それらの手段としてさえ利用されている」³⁾という主張を考えると、アスリートの生きる世界が抱える問題の根は深いのである。

アスリートと競技生活の関係のなかで起きるさまざまな現実的な問題を分析したスポーツ社会学の研究では、アスリートは競技生活の過程において栄光だけでなく困難にも出会うことが指摘されている。アスリートが直面する困難は、競技スポーツからのドロップアウトへとつながる問題でもあり、その原因には人間関係のあつれき、練習の辛さや緊張感からの逃避、スポーツ活動とその他の社会的活動との両立の困難などが考えられる⁴⁾。より高いレベルでの競技生活を送り、さらなる卓越を獲得しようとすればするほど、アスリートに起こり得る困難はより一層越え難いものとなる。

アスリートとライバル関係

アスリートは競技生活に困難があろうとも、またスポーツの世界で生きることが不安定だとしても、日々の練習によって卓越しようと「努力」するような存在である。このようなアスリートについて、競技スポーツの具体的場面ではいったいどこに着目できるだろうか。

一般的に、競技スポーツを実施するアスリートにとって、ライバルのような競争相手がいること

は好ましいことだと考えられている。それは競技スポーツにおける目標が勝利や成功であることに對して、アスリートが自らを奮い立たせる原動力になり得るからである。

ライバルという存在は、しばしば「スポーツの価値」に関連づけられる。我が国では、オリンピック・パラリンピック教育を推進しているが、その中心的価値のひとつとして友情 (Friendship) を説明する。実際に、普及・啓発リーフレットでは「ライバルを支え合う二人の選手に世界が感動」と題し、リオ五輪における陸上競技の一幕を題材としている。少なくとも、競技スポーツにおけるライバルの存在、あるいはその関係には何かしらの価値が認められている。

アスリートからみる他者としてのライバルについて整理をすれば「“他者 (other)” は人、自己、川、山、時間、前回のパフォーマンスあるいは、電信で行うようなスコアや人が不在のものであったりする」⁵⁾。この主張を聞く限り、アスリートはライバルという存在を対人関係のみに限定されるわけではない。それはアスリートが10秒で走れるといったタイム (時間) や、自然といった戸外活動の場すらライバルになり得ると理解できる。ここで、今回着目するライバル関係は、あくまでアスリート (人) 対アスリート (人) 間に設定した。

こうしたライバル同士の競争について、心理学の観点から室山の「課題を媒介として競争する相手で、実力が同程度であり、競争によってお互いに良い影響を及ぼしあう相手」⁶⁾、「勝ち負けを意識した競争相手」⁷⁾「必ずとも競争相手に敵意を持つようになるとは限らない」⁸⁾「たとえ競争を媒介とした対人関係であっても、条件によっては、良い意味での‘ライバル’が形成され得る」⁹⁾という議論を紹介した。ここで指摘したいことは、どのような条件であれば良い意味でのライバル関係になるのか、ということである。

例えば2018年2月、女子スピードスケート選手である小平奈緒が、最大のライバルである李相花 (イ・サンファ) を競技終了後に健闘をたたえたことが報じられた。我々はこれを友情とみて、たしかに価値ある姿だと考えられる。しかし、小平は、はじめからライバルをたたえるために競争していたのではないだろう。これを踏まえて考えると、アスリートにおけるライバル関係は、①競技中あるいは試合に向けた練習中、②競技の終了後で、全く別の関係性があると考えられる。今回の講座では、結果として価値付けられるようなライバル関係ではなく、まさにいま競争の最中にあ^るライバル関係そのものからアスリートの生を考えること、そして、その在り方の一端を「観かた」として紹介した。

参考文献

- 1) Weiss, P. (片岡暁夫訳) (1985)『スポーツとはなにか』不昧堂出版 p.18
- 2) J.D. マンデル・J.R. マンデル (1997)『現代スポーツへの新たなアプローチ』スポーツ社会学研究 5, p.56
- 3) 丹羽劭昭 (1982)『スポーツと生活』朝倉書店 p.42
- 4) 吉田毅 (2001)『競技者の困難克服の道筋に関する社会学的考察』体育学研究 46(3)p.242
- 5) Thomas, C. E. (1983) Sport in a philosophic Context. Lea & Febiger. p.99.
- 6) 室山晴美 (1995)“ライバル”として記述される対人関係に関する一考察. 心理学研究 65(6), p. 460.
- 7) 室山晴美 (1995) 同上論文. p. 460.
- 8) 室山晴美・堀野緑 (1990)競争場面における対人認知および課題認知の変容. 教育心理学研究 38(3), p.269.
- 9) 室山晴美 (1995) 前掲論文. p. 461.